

1 データ整理における検討事項

本年度は、実施項目①にあげられた書籍『日本アニメーション映画史』所収の作品目録のうち、ウェブ版に未登録の1948年から1977年掲載分の作品情報登録を行った。その際、書籍からデータベースへ登録する上で、いくつかの検討事項が生じた。今後の方針にも関わることなので、以下に検討事項の要点を記す。

・誤植や表記の揺れに関して

データ移行に際しては、第一義的に書籍に記載された情報（原文）を尊重し、新たに得られた調査情報や事項については、更新・追加情報として新規に記載することを原則としている。ただし今回、明らかな誤字・脱字・誤記と判断される箇所については、逐一の更新記録を付さずに訂正を行った。これには、漢字の誤用、送り仮名の誤り、意味の取り違いなどが含まれる。個人名や会社名といった固有名詞についても同様の方針で修正を行ったが、表記の揺れに関しては、現行のまま維持した事例もある。

たとえば、会社名における「目黒スタジオ／目黒スタヂオ」や「ビデオ・クラフト社／ビデオクラフト社」などは、クレジットや典拠資料において両方の表記が確認されており、いずれが正式名称であるかは今後の調査に委ねる必要があるため、統一は行わなかった。

同様に、アニメーター「大田朱美／大田朱実」についても、人名辞典（例：Wikipedia）では「大田朱美」とされているが、クレジット上では一時期「大田朱実」と表記されていたことが確認されており、現時点では統一せず保留とした。人名に関しては、クレジット上で誤記が継続している可能性も否定できないが、作品クレジットという一次情報源を尊重する観点からも、現段階ではあえて統一を避けている。

これらの表記揺れや誤記の扱いについては、今後の調査課題としたい。

・データベース化に向けた情報の補足

書籍では、作品が時系列に沿って配列されているため、読者にとって文脈の流れが自然であり、特に違和感を覚えることは少ない。しかし、これをデータベースとして個別の作品単位に切り分けた場合、補足情報がなければ文脈が不十分となる事例も存在する。ここでは、その代表的な例を二つ取り上げる。

まず、1964年に東映が上映した「まんが大行進」について見てみよう。書籍では、以下のように記載されている。

■まんが大行進

製作・東映動画 2時間50分 7月21日東映系封切

〔解説〕TVシリーズの劇場公開版。以下、同時上映。

▶少年忍者・風のフジ丸・謎のアラビア人形

製作〔以下、省略。同時上映の他作品も同様〕

▶狼少年ケン・サーカスから来た仲間

▶エイトマン・ロボット 007、光線銃レーザー

▶鉄人 28 号・ミラクル魔術団、海底基地

ここで用いられている「■」は、書籍全体を通して作品単位を示す記号である。一方、「▶」はこの箇所に特有の記号であり、「まんが大行進」の同時上映作品を示していると考えられる。今回のデータベース化にあたっては、「まんが大行進」を映画興行のプログラム・タイトルではあるが、独立した作品タイトルとして登録し、同時上映された 4 作品については、それぞれに「公開年月日」や「封切」情報を個別に付与するかたちで整理を行った。

二つ目の例として挙げられるのは、映画祭などでまとめて上映された、主に短篇の実験アニメーション作品である。1964 年 9 月に草月ホールで第一回「アニメーション・フェスティバル」が開催された。この映画祭については、書籍では久里洋二の『ザ・ボタン (The Button)』にそのことが明記されており、以下の 14 作品『男と女と犬 (MAN and WOMAN and DOG)』『リング・リング・ボーイ (Ring Ring Boy)』『アオス (AOS)』『女-余の助異聞』『月のはなし』『潜水艦カシオペア』『La Fete Blanche (白い祭り)』『アンソロジーNo.1』『KISS KISS KISS』『殺人 (MURDER)』『メモリー』『人魚』『ZURAW』『BON BON BON』には、「同アニメ・フェスティバルで公開」として記載されている。これらの作品については、データベース化にあたり、映画祭の正式名称および「公開年月日」をそれぞれの作品データに追記した。

2 神戸発掘映画祭での調査報告

実施項目③にある公開と発表のうち、2025 年 10 月の神戸発掘映画祭において新規デジタル化 4 作品の上映と調査報告を行った。以下、4 作品の調査概要を記載する。当日の配付資料では典拠情報の詳細を引用・貼付しており、併せて参照願いたい。なお冒頭の NAE 番号は書籍『日本アニメーション映画史』作品目録の通し番号で、データベースではリスト ID としている。

1. NAE0053 『曾我夜討』(木村白山、1926 年) / 別題『曾我兄弟』『夜討曾我』

上映されたのは、伴野商店発売の 9.5mm パターベビー版「曾我兄弟」全 2 巻のうち第 1 巻目のみ。第 2 巻は個人所蔵で、ウェブサイト「映画の郷」で紹介されている。タイトルは複数存在し、文献や検閲記録では「曾我夜討」「夜討曾我」「曾我兄弟」と表記が揺れている。書籍『日本アニメーション映画史』ではその作風を「にしき絵風の墨絵」と紹介しているが、

実際の作品では劇画調といった方が妥当である。しかし、鎌倉時代の有名な仇討事件「曾我兄弟の仇討」を題材にした作品だけに、殺陣の描写も迫力あり、一部に滑稽なキャラクターも登場することから、木村白山の他作品との作風の類似性が見られる。作者名のクレジットはないが、作風や検閲記録から木村白山作とする説が有効であると思われる。

2. NAE0203『あっぱれ安さん』(大石郁雄、1931年)

伴野文三郎商店製作とクレジットに記載のある、9.5mm パターベビー版のレコード・トーキー作品。音声はニッソーレコード 5036AB の「血煙高田の馬場」映画説明レコード(弁士：島津健二)と同期しているが、現在のところレコードは見つかっていない。内容は、伊藤大輔監督の実写劇映画『血煙高田の馬場』(1928年)を漫画化したパロディ作品で、主演は「大河内傳五郎」とされ、大河内傳次郎の弟という設定である。劇映画版のスピーディなカメラワークを意識したと思われる縦方向の動きの表現などがあり、アニメーション技術的にも見どころが多い。発売は「日活ライブラリー」や「日活グラフ」とされ、16mm と 9.5mm の両フォーマットで販売された。さらに、検閲記録から同時に 17.5mm も製作されていたことが判明した。作者の大石郁雄は P.C.L. (のちの東宝) 時代の『動絵狐狸達引』(1933年)が有名な監督であるが、それ以前の小型映画時代については完全なフィルモグラフィも存在せず、この作品の発見は作家研究の上からも重要である。

3. NAE0209『あひるの子』(村田安司、1932年)

上映素材は 16mm トーキー版で、メインタイトルやクレジットは欠落しているが、内容はほぼ完全である。このトーキー版の発見によって、『日本アニメーション映画史』の解説にあるとおり、冒頭と終結部には、セーラー服の女学生が H・C・アンデルセンの童話「みにくいあひるの子」をデンマーク語の原著で読んでいる実写が挿入されていることが確認された。なお、従来知られていたサイレント版は国立映画アーカイブのウェブサイト「日本アニメーション映画クラシックス」で全篇公開しているが、素材提供は神戸映画資料館所蔵の 16mm プリントである。内容は、アンデルセンの「みにくいあひるの子」を翻案したもので、原作と異なり、白鳥の親ではなく、卵を温めてくれた「あひるの母親」への感謝を描くという、日本的な情緒が強調されている。録音方式は横浜シネマ商会が採用していた「吉阪式」で書籍『日本アニメーション映画史』では「音楽伴奏版」となっているが、会話の部分は女声ナレーションが入っており、サイレント版に音楽伴奏を付けたバージョンではないことも確認された。

4. NAE0229『お猿の大漁』(村田安司、1933年)

上映されたのは、これまで現存が確認されていなかった 16mm トーキーであるが、後半が欠落している短縮版である。サイレント版(サクラグラフ)は神戸映画資料館に現存し、後半の計略シーンも含まれており、資料館のウェブサイトでその一部が公開されている。こ

の作品は、サイレント時代にナンセンス漫画作家として評判をとった村田安司が、本格的にトーキー漫画に挑戦した記念碑的作品である。お猿と大鯰の対決を描いたナンセンス・ギャグアニメの面白さは、現存部分の「魚関銃の猛撃を受けてこっちはすっかりグロッキーよ」といった台詞にも現われている。機関銃ではなく、魚の銃つまり「魚関銃」など台詞回しにも工夫を凝らしていたことが見て取れる。プリントのメインタイトル部分に「M-106」という GHQ 占領下の認証番号が焼付けられているので、戦後の再録音版の可能性も捨てきれないが、現時点ではオリジナルのトーキー版と見做してもいいと考えている。

以上のように、すでに現存が確認されている作品であっても、よりオリジナルに近いバージョンが新たに発見されることで、作品データが随時更新されていくことがある。とりわけ、教育現場や家庭での上映が、劇場公開以上に主たる流通経路であった戦前期のアニメーション映画においては、その傾向が顕著である。ゆえに、今後も参照され続ける基本データの精度を上げていくことは、根気と慎重さが求められるものの、きわめて重要な作業であるといえる。